東北教区報　2023年5月号

あけぼの

発行所
日本聖公会 東北教区
仙台市青葉区国分町2-13-15
TEL 022-223-2349
FAX 022-223-2387
URL https://nskk-tohoku.com/

シリーズ「東北の信徒への手紙」
「さあ、行こう～わたしたちのミッション 主から遣わされている一人として～」

司祭　ステパノ　越山　哲也

野球の世界一を決める国別対抗試合ＷＢＣ（ワールド・ベースボール・クラシック）に夢中になった方も多いと思います。私も無類の野球好きでありまして、ＷＢＣ開催中は毎日夢中になっていました。試合前に日本代表の選手の一人が声出しをする場面があり、私は試合の内容もさることながら声出しの内容にも夢中になって聴いていました。決勝戦の日、声出しを務めたのは大谷翔平選手でした。第一声は「僕から一個だけ。憧れるのをやめましょう」でした。

その真意は、「決勝の対戦相手であるアメリカの選手は、野球をやっていたら誰しも聞いたことがあるようなスーパースターばかりだと思う。僕らは今日超えるために、トップになるために来たので、今日一日だけは彼らへの憧れを捨てて、勝つことだけ考えていきましょう。」というものでした。

そして決意を込めた表情で「さあ、行こう！」と選手全員を鼓舞し、その場に拍手が響きました。大谷選手の言葉によって最高のムードができました。私は大変印象的な場面として心に残りました。

そして、選手たちに声出しの最後に決まっていう言葉があることに気づきました。それは「さあ、行こう」です。選手を自分も含めて送り出す最大の力強い励ましの派遣の言葉だと思いました。

教会を意味する「エクレシア」は「主によって集められた民の群れ」という意味があります。そして、宣教とは、主語は「わたし」ではなく神様であって神様が神の国の完成、つまりすべての被造物が真の平和の状態の内に生きることが出来る世界の完成のために働かれている「神の国運動」（ジーザスムーヴメント）に私たちは招かれている。そして神の国は教会という建物の中にあるのではなくこの世界にあるということを主イエスは私たちを「派遣」することで示されました。福音書でも主によって集められた弟子たちを派遣する箇所がいくつも出てきます。

「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。」（マタイ10：16）

これからあなたがたの人生には苦難が待ち構えているだろう。でも恐れてはいけない。私が必ずあなたと共にいると弟子たちを励まし彼らを送り出しました。その派遣の言葉はご自身にも向けられていたのだと思います。主ご自身も幾度となく十字架の苦難の道を歩むことを躊躇され、苦悩されている様子が福音書に記されています。

礼拝も主からの招きによってはじまり、「ハレルヤ、主とともに行きましょう」という派遣の言葉によって終わります。

エクレシアは主によって「集められ」、そして「派遣される」民の群れであることを私たちは忘れてはいけないと思います。私たちは新主教を迎えて新たな歩みを始めようとしています。私はワクワクしています。同時に、私たちがそれぞれ置かれている現実の課題や困難にしっかりと向き合い、恵みを発見していきたいと思います。私たちは神の国運動に主から招かれ、そして遣わされているのです。

「さあ、行きましょう!!」

主とともに。

（盛岡聖公会牧師）

東日本大震災12周年記念の祈り

2023年３月11日（土）

今年で東日本大震災発生から12年が経ち、私たちは記念礼拝とオンライン講演会を催しました。今年も昨年同様コロナ禍でしたので、1ヵ所に集まるのは断念して、それぞれの地で礼拝するようにしました。東日本大震災12周年記念の祈りは、3月11日（土）午後2時15分から東北教区内10教会を会場にして献げられました。福島、郡山、小名浜、若松、仙台基督、仙台聖フランシス、盛岡、秋田、八戸、青森の各教会で一斉に行われました（正式教会名は省略）。他教区教会の数カ所や個人から祈りましたとの報告を受け、被災の地と被災された人たちへの思いを全国の信徒たちと一つにしたと実感できました。礼拝式文は東北教区ホームページからもダウンロードしてどこでも同じものを使い、同時刻に共通の祈りと聖歌を歌うようにしました。勧話は各会場に委せ、午後2時46分に教会の鐘を鳴らして、東日本大震災による死者行方不明者と震災関連死者を含めた22,212人（2023年3月1日警察庁まとめ）の平安を覚えて1分間黙祷しました。八木正言司祭司式、吉田雅人主教説教の主教座聖堂仙台基督教会での礼拝は日本聖公会東北教区YouTubeチャンネルで生配信され、配信後も保存されているので、いつでも視聴できますからアクセスしてご覧ください。

また記念礼拝での信施は、講師の片岡輝美さんが関わっている「これ以上海を汚すな！市民会議」と「民の声新聞・鈴木博喜記者」のために献げられました。

記念講演会は主教座聖堂仙台基督教会で開催し、ライブ配信して全国どこでもご覧になれるようにしました。「主に喜ばれる生き方を吟味する～福島からのメッセージ～」と題して片岡輝美さんがお話しくださいました。午後4時40分終了の予定でしたが活発な質疑応答があり時間オーバーするほどで、福島の現状と信仰者としての行動に対する関心の高さが伺われました。

私たちは、大震災と原発爆発事故が未だに様々な被害と影響を及ぼしている現実を直視し、信仰をもって向き合う重要さを改めて考えた日となりました。

また信徒3名が津波によって亡くなられた磯山聖ヨハネ教会は、3月12日、祈りの庭（旧磯山聖ヨハネ教会境内地）で礼拝をされました。

（東日本大震災被災者支援プロジェクトリーダー　司祭　長谷川清純）

記念講演

主に喜ばれる生き方を吟味する

～福島からのメッセージ～（要約）

講師　片岡　輝美　氏

12年前の3月11日。福島第一原子力発電所の爆発事故が発生しました。桜の花を眺めながら、来年はこの桜を見ることができないかもしれないと恐怖を感じていました。でも、そんな恐ろしい思いをしながらも、これからみんなで原発の無い世界を造っていくんだと信じていました。原発回帰に舵を切るなど想像もしていませんでした。地震大国の日本が原発を稼働する理由は何一つありません。

この12年間、多くの悲しみや怒りを聴いてきました。私が何故ここに立っているのか、立つ資格があるのか、キリスト者として何をしてきたのか、ゆらぎの中にいます。そんな私を支えてくれるのは、毎週守っている礼拝であり、そこに集う仲間たちです。そして多くのみ言葉も私の支えとなっています。その中の2つを分かち合いたいと思います。

「何が主に喜ばれるかを吟味しなさい（エフェソ5：10）」。吟味するとはよく調べて選びとることです。「知る力と見抜く力を身につけて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように（フィリピ1：9）」。共に生き、本当に重要なことを見分けるために、事実を知る力、真実を見抜く力を身につける必要があると思います。

3月11日の午後7時3分に原子力緊急事態宣言が出されました。そしてそれは12年たった今も解除されていません。にもかかわらず避難区域は解除されるという不思議なことが起こっているのです。

世界最大の原発は新潟県の柏崎刈羽原発です。もし冬の大雪の時期に事故が起きたら、避難するすべはありません。現地だけでなく、偏西風に乗って北日本全体が被害にあいます。

12年前の事故の混乱の中、

福島県立医科大学では震災翌日に安定ヨウ素剤の配布準備をしていたのですが、福島の放射線管理リスクアドバイザーに就任した山下俊一氏に判断を任せると「不要」とのことで配られませんでした。その後山下氏は「ニコニコしている人のところに放射能はこない」「今は国家の緊急時、国民は国家に従うべき」といった発言を重ね、私たち国民は分断されました。放射能に不安を抱える母親たちがその不安を言えない状況に追い込まれていったのです。山下氏らを委嘱した目的と責任はどこにあるのかを、裁判で明らかにしようとしています。しかし、子ども人権裁判は、2月1日に全面敗訴してしまいました。あの時、国や県は子どもを守らず、子どもや市民に無用な被ばくを強いたのです。内部被ばくは今も続いています。子ども脱被ばく裁判の争点は各災害の核心です。

福島第一原子力発電所の汚染水を浄化したとされるＡＬＰＳ処理水ですが、東電のＨＰにある「安全は確保されている」という記述に反し、海洋学者ら専門家パネルの覚書には「東電の放射性物質の種類や量などの知識は深刻なほど不十分」「タンク群から30リットルのサンプルが1回しか採取されていない」「ＩＡＥＡは東電に統計的に測定するように要求していない」とあり、東電の汚染水抽出のデータ分析は「不完全で不正確で一貫性がない」と表明しています。私たちは、一方的に与えられた情報を鵜呑みにするのではなく、検証に基づいた正確な情報を収集し判断するということが大切なのだと思います。例えば、汚染水は海水と混ざることで薄まるといわれていますが、海水は上部と下部では濃度が異なるため、トリチウムなどは濃度が薄まらずに漂う可能性があるともいわれているのです。

これまで私たちの情報センターでは放射性物資の測定を続けてきました。その内容を吟味し、どういった工夫をすればより安全に生活できるのかもわかってきました。安全だと思われていた室内でも放射性物質が検出されたときには、土足での利用が原因だとわかり、掃除を徹底し、より安全な場所で活動するなど工夫をしました。

復興の名のもとに国がどのような政策をとっていくのかにも注意を向けたいと思います。懸念しているのは教育現場が利用されることです。経産省は、風評被害払拭のため、福島県の食材を学校給食に採用し食育をしようとしました。しかし、自治体の態度は慎重で実施には至っていないようです。私たちはそれぞれの自治体に電話をかけ、今後も熟慮の判断をとお願いしました。全国の高校では出前授業がなされ、処理水は安全だと教育されています。それぞれの立場で思いが異なるのはわかります。ですが、それを教育現場に持ち込んではいけないと強く思うのです。

気がかりなのは、福島県の児童虐待件数が増加していることです。中でも心理的虐待が増えています。おそらく、震災以降に子ども時代を過ごした親世代が、必死な大人たちの中で泣けない、甘えられない時期を過ごしてきたことが原因の一つではないかと思っています。いじめや不登校も増加しています。不登校ではこれといった理由がなく学校へ通えないといったケースも多いです。いったい何がおきているのか。これが震災後のゆがみなのではと思います。

この国は、悲しむ人の悲しみを、不安を許さない国だと思ってしまいます。「復興」「原発は安全」といった風潮は、被災地の悲しみを奪い、放射能に不安を抱える人たちの口を封じます。そして原発回帰。12年前の恐怖や悲しみを繰り返すというのでしょうか。誰も核と共存できないのに。

最後にみ言葉を分かち合いたいと思います。

「人よ、何が善であり、主が何をお前に求めておられるかは、お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである。（ミカ書６：８）」

このみ言葉がどういうことを表しているのか。それぞれの場で考えて行動に移していければと思います。

（文責　東日本大震災被災者支援プロジェクト　八木陽子）

講師　片岡輝美氏

1961年福島県生まれ。会津若松市在住。日本基督教団若松栄町教会員。2011年7月「会津放射能情報センター」を設立し代表となる。「会津放射能情報センター」代表。「子ども脱被ばく裁判の会」と「これ以上海を汚すな！市民会議」の共同代表。「宗教者が核燃料サイクル事業廃止を求める裁判」原告。

アーカイブはこちらから
ご覧頂けます

↑記念講演　↑記念の祈り

セントポール幼稚園
園長　齋藤　亜紀子

「卒園生を送りだして…」

２０２３年３月17日、神様の恵みとお守りを感じながら、卒園式が挙行され、年長児がセントポール幼稚園を巣立っていきました。３月に入り、入堂の仕方や卒園証書のもらい方、卒園の歌など、園生活の集大成となるように毎日練習を重ねていました。はじめは保育室ですが、本番間近になると場所を聖堂に変え、保育室の椅子を持ち込んで練習をします。

椅子を聖堂に持っていってしまうと、当然のことながら保育室では椅子がない状態。そこで、昼食タイムは布のラグを敷いて、ちょっとした遠足気分です。３月でも暖かな晴れた日は、外でシートを敷いて昼食。いつもの給食も二倍三倍に美味しく感じました。

そして、年長児にとって幼稚園最後のお弁当の日がやってきました。毎年恒例、お家の人には内緒の「秘密の作戦」が始まります。ずっとお弁当を作り続けてくれたお家の方へ感謝を込めて、食べ終わった弁当箱を、子どもたちが自分で洗って拭き取ります。ピカピカになった空の弁当箱に、「今まで美味しいお弁当を作ってくれてありがとう！」と手書きのメッセージカードを入れて持ち帰りました。さて、おうちの方の反応は？と気にしていると「僕のお母さん、泣いちゃったよ。」「お母さん、嬉しいって喜んでくれた。」と子どもたちが報告してくれていました。「感謝の気持ちのプレゼントだね」と、皆で話していました。

そうして迎えた卒園式の朝。４年保育のＹちゃんのお母様から「体調不良で欠席」と電話がありました。このご時世だけに無理に参加していただくのも難しく、何より体調の悪い本人が辛いだろうと考え、全員揃っての式は断念せざるを得ませんでした。職員一同、目の前の22名の子どもたちを祝福しつつ、Ｙちゃんにも思いを馳せていたように感じました。Ｙちゃんの回復を待って２週間遅れで「Ｙちゃんの卒園式」を行いました。一部の先生やお家の方にも参加していただき、「これで心置きなく小学校に行けるね。」と、年長児23名全員を送り出すことができました。子どもたちが神様と皆様のお守りの中で確かな成長が与えられたことに感謝いたします。祈りと感謝と喜びの生活が実現できる保育を目指していきたいと思います。

北海道教区・東北教区宣教協働タスクフォース「チーム北国」第１回ミーティング報告

チーム北国メンバー　バルナバ　赤坂　有司

北海道・東北両教区の宣教協働と教区再編へ向けて動き出すため、昨年の両教区の定期教区会で、北海道教区・東北教区宣教協働タスクフォース「チーム北国」を設置する議案が可決されました。その目的は、両教区の宣教協働、教区再編の課題とヴィジョンを明確化し、今後のロードマップを策定することです。早期の開催を目指していましたが、３月２日にようやく第一回目のミーティングを札幌キリスト教会＋オンラインで行い、早速チーム北国の活動について活発に意見を出し合いました。

そこではまず、それぞれの教区の課題やヴィジョンを出し合い、現状を共有し、違いや多様性を見い出す楽しさを感じられるように、教役者、信徒、教会などさまざまなレベルで出会い、分かち合う機会を大事にしていくことが重要なことを確認しました。

チーム北国は、両教区の宣教協働と教区再編へ向けた動きをリードする役割を果たしながらも、各教会信徒が協働・再編について理解する速度に配慮し、皆で雰囲気を醸成することを目指します。その方向性を提示するため、宣教協働の積極的な意味付けを見出し、そのメリットをアピールしていくこととしました。

そして、東北教区の新主教の任期が５年であることを考慮し、５年後に照準を合わせたヴィジョンを示す必要があるとして、「理論」と「実践」の二つの軸で活動を進めるロードマップを作成していきます。一年目は「出会い」の年とし、次回「出会い」のアイディアを持ち寄り、11月の定期教区会までのタスクを明確にする予定です。

今年度は親交を深めるため可能な限り対面で行うことも確認し、次回は４月28日に仙台基督教会で行います。

「東北須磨の地に再び」

仙台基督教会
エリザベス　松谷　演子

東日本大震災で東松島市野蒜（ぴる）にあった家を津波で失いました。その家は私の夫が職場を東北大学から石巻専修大学に移籍したのを機に、通勤に便利なようにと建てた、いわばセカンドハウスでしたが、私たち夫婦はともに関西出身で仙台の自宅がマンションだったこともあり、野蒜は東北での礎となる場所として選んだ地でした。土地を見に行った時に野蒜の海に出てみました。その時私は「夫の故郷の神戸の須磨の海に似ている」と思ったのです。のちに野蒜の駅名が戦前は「東北須磨」だったことを知り、不思議な縁を感じました。２００８年から夫は週日は野蒜の家から大学に通い、私は週に何日か過ごすという生活が始まりました。野蒜は町に添って東名運河が流れ、海岸に続く松林が美しく、牡蠣やあさりなどの海の恵みもあり、私たちは大好きになりました。

地震発生時、私は仙台に、夫は大学にいて助かりましたが、野蒜地区は大きな被害となり、私の家も10ｍの津波に襲われました。ガソリンを手に入れてすぐ野蒜に行きました。津波をかぶった町全体が色のない世界となり、運河には家の屋根や車が浮き、道路の両側もがれきで埋もれていました。我が家は残っていましたが、家の中にがれきが流れ込み、庭はがれきと共に車が縦に突き刺さっていました。気が付いたら私は声をあげて泣いていました。私たちの礎となると思った町が無残な姿になり、神様から「ＮＯ！」と言われたように思ったからです。その後、東北沿岸の被害が報道される度に押しつぶされそうな悲しみに襲われました。なぜ神さまはこのようなことをされたのかと。

震災から半年が過ぎた頃、徐々に被災した方々が立ち上がる姿が報道されるようになりました。がれきの中で細々と商いを始めた、船も家も失ったけどまた漁を再開したなど。私はそれを聞くたびに心の中から溢れる熱いものでいっぱいになりました。そして太古から東北に住む人々は天災や飢饉を何度も乗り越えてきたことを思い、神様は私にそれを教えたくてこの経験を与えたのかもしれないと思うようになったのです。

野蒜地区の復興計画は壮大なものでした。町の北部の山を崩して造成し、東名駅と野蒜駅を高架にし、被災地最大の集団移転地を造るというものでした。それには６年の歳月を要しました。その間、仮設住宅で過ごさなければいけない被災者の方々を思うと気が遠くなる思いでした。一方仙台で不自由のない生活を送っている自分が無力に思いましたが、「再建してまた野蒜に住む」ことが、私たちにできる最大の復興支援だと思い、時を待ちました。そして２０１７年に野蒜は「野蒜ヶ丘」と名前を変え、新しい町に生まれ変わりました。

これからは一日でも長く再建した小さな家で野蒜の復興を二人で見ていきたいと思っています。主に感謝します。

常置委員会報告（第６回・３月13日）

◇常置委員会報告

北海道教区・東北教区宣教協働タスクフォース「チーム北国」が３月２日に始動したことを報告。

◇協議事項

(1)　２０２３年度信徒奉事者推挙：能代キリスト教会より２名の推薦状が提出され、これを適当と認め、教区主教に推挙。

(2)　研学資金申請について：教育主事提出の、奉仕職養成グループからの研学資金申請「教役者大斎黙想会」について、これを追認。

(3)　新型コロナウイルス感染症に関する教区内への新たな指針の発信について：現状の諸制約は段階的に緩和していくこと、愛餐会等は４月中は控えること、教会は不特定多数が集まり、高齢者、基礎疾患のある方も多いことから、マスクの着用、消毒等は継続を推奨すること。以上について３月13日付で「東北教区主日礼拝ならびに宣教活動のための指針Ｎｏ・10」として発出することを承認。

東日本大震災被災者支援プロジェクト報告

◆「水曜喫茶」３月８日に開催し７名（内スタッフ３名）の参加でした。◆「お買い物支援バス」２日、９日、16日、30日の４回運行で毎回２名が利用しました。23日は利用者なしでした。昨年の秋頃から参加者が減少、12月頃から１～２名やなしの日も生じてきました。東日本大震災後、仙台基督教会信徒さんら閑上の住民が暮らす名取市箱塚桜仮設に、「いっしょに歩こう！プロジェクト」が入って仮設暮らしの人たちを様々な形で支援し、お買い物バスも時を同じくして運行、週１回のお買い物の足またコミュニケーションの場になってました。12年が経過し、参加者を取り巻く環境変化と購買条件整備がなされています。仮設から災害復興公営住宅に暮らす人たちとの出会いを大切に、親しく交流したお恵みに感謝し、今後の神様のご加護を祈りつつ、５月末をもって一区切り活動終了することを決定いたしました。

（リーダー　司祭　長谷川清純）

北から南から

八戸聖ルカ教会

伝統芸能「えんぶり」の時期になると春近しといわれますが、今年の春はゆっくり来てもいい、と思う私たちでした。

２年前、神戸教区から出向で赴任された遠藤司祭は、４月から山形へ異動となりました。慣れない気候、言葉の中で、幼稚園の子らに慕われ、若い力で私たちを指導くださいました。八戸は定住教役者不在となりますが、聖職を志す方が増し加えられることを祈りつつ、一同心を一つに歩んでまいります。

秋田聖救主教会

３月26日に、涌井司祭と共に最後の聖餐式をお献げしました。

着任直後の５月のお葬式を始めとして、過去３年間で信徒６名が召されました。全員マスク着用で礼拝に出席したことに加え、礼拝休止の期間も合計４ヵ月近くに及んだので、信徒の顔と名前を一致させるのにもご苦労なさったと思います。困難な状況の中で、粘り強く牧会に励んでくださった涌井司祭と天の父なる神様に感謝いたします。

小名浜聖テモテ教会

３月26日、２年間定住してくださった松本正俊司祭の最終礼拝が献げられ、礼拝後「感謝のつどい」を開催しました。「祈ること」を心をこめて教えてくださった司祭様への、教会の皆様、幼稚園スタッフの皆様の心からの感動的な一言メッセージをお伝えできた「感謝のつどい」でした。主に感謝いたします。

磯山聖ヨハネ教会

「あのね、私、東北お遍路っていうのやってんの」津波で流された老舗旅館の女将が言った。東日本大震災の被災地に千年後も語り継がれる慰霊・鎮魂の「心の道」を作りたいという。磯山の旧教会跡地は煉瓦募金の「祈りの煉瓦」のある「祈りの庭」として、３月11日を中心に祈りを献げてきたが、昨年お遍路巡礼地に登録された。多くの人が訪れるかもしれない。「祈りの鐘」の響くこの庭は、誰もがくつろげる場所にしたい。

※「東北お遍路」は、東日本大震災の伝承と慰霊、鎮魂を目的とした、民間の一般財団法人が運営するプロジェクトです。

洗礼おめでとう

ルカ　山本　甫
（２月27日・郡山）

テレサ　相澤　雅子
（４月９日・盛岡）

初陪餐おめでとう

テレサ　相澤　雅子
（４月９日・盛岡）

聖婚式おめでとう

ウイリアム　渡邊　海
阪本　晶葉
（４月15日・盛岡）

永遠の平安

マリヤ　川又　和子
（２月20日・大館）

ルカ　山本　甫
（２月27日・郡山）

エリザベス　村上　多佳子
（３月６日・盛岡）

5月逝去者記念聖餐式

5月10日(水)　午前10時～
於　主教座聖堂
司式・説教　長谷川清純　師

※４月逝去者とあわせて行います。

司祭　Allan Worthington Cooke
１９４４年５月６日逝去

宣教師　Miss Irene P. Mann
１９２７年５月19日逝去

司祭　アントニオ 影山 博美
２０２０年５月20日逝去

宣教師　Miss Dorothy F. Hittle
１９４０年５月28日逝去

司祭　バルナバ 与賀田 千秋
１９９７年５月28日逝去

司祭　ナタナエル 佐々木 正市
１９９６年５月29日逝去

※主教動静により、教区関係教役者逝去記念聖餐式は原則として毎月第一水曜日に行うことになりました。

５月７日は「東北教区の青少年活動を覚え支える主日」です。教区の青年たちの活動を覚え、お祈りください。この主日のためにお献げいただいた信施は、東北教区の青少年活動、管区等青少年プログラムへの参加補助等に用いられます。

東北教区の青少年のための祈り

あなたの若い日にあなたの造り主を覚えよ、と聖書のうちに教えてくださった主よ、私たちは東北教区の教会の青少年を覚えて祈ります。どうか一人ひとりの心を励まして、喜びと希望を持って信仰の道を歩むことができますようお導きください。青少年たちが互いに出会い、祈り、語り合う中で、交わりの輪が豊かにされますように。そして教会の中で、また社会の中でその務めを果たすことができますように。主イエス・キリストによってお願いいたします。　アーメン